施設だより愛の園

第23号
2017／12

外国人介護士の受け入れ

「あなたは白髪の老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」（レビ一九：三二）

社会福祉法人 ぶどうの枝福祉会
愛の園　統括園長　信川恒夫

今年も早いもので、クリスマスの時期を迎えようとしています。愛の園でもクリスマスツリーを飾り、玄関にはイエス様降誕の人形を飾りました。今年のアドベント（待降節）は、愛の園にとって特別な時です。昨年フィリピンのマニラで面接したフィリピン女性二名が半年間の日本語研修を終え、いよいよ十二月五日から愛の園で介護の仕事に就きます。

さて、急激な小子高齢化によって、二〇二五年には日本全国で認知症高齢者が七百万人に増え、三十八万人の介護人材が不足すると言われています。愛の園でも既に特養の介護士として、フィリピン人の女性とオーストラリア人の男性が非常勤で働いています。この外国人二名が介護の現場に入ったことによって、現場職員の笑顔が増えたように感じます。そして、今回二人のフィリピン女性が加わり、更に来年度はフィリピン男性が、愛の園で働くことになっています。

昨今の求人状況を見ますと、私は外国の方々を受け入れなければ、介護現場の維持は難しいと思っています。そして、外国の方々を受け入れることによって、私たち自身も日本の良さを再認識し、彼女たちの働く姿を目の当たりにすることによって、多くを学べればと願っています。

今回彼女たちの採用に当たって、私は雇用契約書を改めてジックリ読む機会を得ました。そして、職員を新たに雇用することの意味と責任を再確認しました。彼女たちは、愛の園で三年間介護の勉強をした後、介護福祉士の国家試験を受験することになります。仕事と日本語の学び、受験勉強をこなしながら、慣れない日本での生活を送ることになります。

先日、現在横浜で日本語を勉強中の彼女たち二人を神戸に招待しました。二人は、これから始まる新しい生活と仕事に対して、抱負を笑顔で語ってくれました。日曜日には、私と一緒にカトリック教会の英語の礼拝にも出席しました。教会には多くのフィリピン人もおられ、彼女たちはタガログ語で楽しそうに会話されていました。

愛の園の将来にとって、人材確保と育成は喫緊の課題です。彼女たちが介護福祉士の合格を目指し、笑顔で働き続けられる環境であれば、日本人の私たちにとっても、愛の園は長く働き続けられるより良い職場になると思っています。